



営農タイムリー！



発生予察情報について(8月)

2023年8月1日発行

病害虫発生予報第6号(8月)

京都府病害虫防除所より、8月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第6号(8月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	いもち病(穂いもち)	多 (やや多)
	紋枯病	並 (やや多)
	セジロウンカ	やや少 (やや多)
	トビロウンカ	並 (並)
	ツマグロヨコバイ	少 (並)
	斑点米カメムシ類	やや多 (やや多)
	コブノメイガ	やや多 (並)
ブドウ	べと病	やや少 (やや多)
カキ	炭疽病	並 (並)
	うどんこ病	やや少 (やや少)
果樹全般	カメムシ類	やや少 (やや少)
果菜類	うどんこ病	やや少 (やや少)
	ハモグリバエ類	やや少 (並)
	アザミウマ類	やや少 (並)
キュウリ	べと病	やや少 (やや少)
	褐斑病	並 (並)
	炭疽病	やや少 (やや少)
	斑点細菌病	並 (並)
ネギ	ネギアザミウマ	並 (やや多)
	ネギハモグリバエ	並 (やや多)
	シロイチモジヨトウ	やや多 (多)
野菜全般	ハダニ類	やや多 (やや多)
	ハスモンヨトウ	やや多 (多)

イネ

1. いもち病（穂いもち）

予報内容 発生量： **平年比 多い（前年比 やや多い）**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）上位葉へ進展した**葉いもち**の病斑は、**穂いもち**の重要な伝染源となる。
- （2）**穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。**
- （3）コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに**葉いもち**が多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- （4）粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- （5）**カメムシ**との同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。

2. 紋枯病 予報内容 発生量： **平年並（前年比 やや多い）**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）分けつ期ごろの水際の葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- （2）早期栽培で発生が多く、**気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。**
- （3）出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように散布する。なお、**穂いもち**との同時防除を考慮する。
- （4）昨年多発したほ場では、深水管理しない。
- （5）窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3. セジロウンカ

予報内容 発生量： **平年比 やや少ない（前年比 やや多い）**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）海外からの飛来害虫である。
- （2）成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、**幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。**

4. トビイロウンカ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫であり、今後発表される病虫害発生予察情報に注意する。
- (2) 株当たり5頭以上もしくは短翅虫を10株当たり2頭以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

5. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年比少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

6. 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、特に、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、草刈り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 穂揃期と傾穂期の防除(共同、一斉)が有効である。
- (5) これまでに山城地域と丹波地域の一部でミナミアオカメムシの発生を確認している。本種は、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

7. コブノメイガ

予報内容 発生量 : **平年比 やや多い** (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。

果 樹

1. フドウ ベと病

予報内容 発生量 : **平年やや少** (**前年比 やや多い**)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は22～25℃である。雨が多く、気温が低めに経過する冷夏の年は多発しやすい。

2. カキ 炭疽病

予報内容 発生量 : **平年並** (**前年並**)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので害虫防除を徹底する。

3. カキ うどんこ病

予報内容 発生量 : **平年比やや少ない** (**前年比やや少ない**)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は15～25℃である。8月の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。
- (2) 8月下旬頃から発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。

4. 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 7月下旬頃からは新成虫の発生時期となり密度が高まるので、成虫及び幼虫の寄生や卵塊を見逃さないように、定期的に園内を見回る。
- (2) **カキ**の被害は7月中旬以降に発生することが多い。8月中下旬までに加害された果実の多くは落果する。
- (3) **カメムシ類**は局地的に発生し被害をもたらすこともあるので、園内外の成虫発生状況をこまめに観察し、発生を認めたら早めに防除すること。特に、山林等の隣接園では注意が必要となる。
- (4) 収穫期に近い果樹は、他の病害虫防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
- (5) 合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避ける。

野菜

1. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20℃前後、比較的低い湿度で多発する。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (3) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- (4) トウガラシ類では、ハダニ類による被害との判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (5) 菌糸が組織内で増殖するので、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。

2. キュウリ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

3. キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は25～30℃で、高温多湿条件下で多発する。
- (2) 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。
- (3) 施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。
- (4) 窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (5) 被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。

4. キュウリ 炭疽病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。

5. キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量： 平年並（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔等から入って発病するが多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- (4) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

6. 野菜全般 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除を行う。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

7. 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (3) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (4) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。

8. 果 菜 類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アザミウマ類**には直接加害するだけでなく、**ミカンキイロアザミウマ**や**ネギアザミウマ**等 **ウイルス病**を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、**高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。**
- (3) **ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。**

9. ネ ギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年並 **（前年比やや多い）**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) **アイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)**による病害で**ネギえそ条斑病**を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、**赤色系防虫ネット**や**UVカットフィルム**による物理的防除が効果的である。本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する
- (4) 被害葉及び収穫残さが等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は**系統の異なる薬剤をローテーション散布**する。

10. ネ ギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年並 **（前年比やや多い）**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **幼虫**が葉肉部分を加害し、**白い筋状の食害痕**を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

11. ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 : **平年比やや多い (前年比多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

12. 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : **平年比やや多い (前年比多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生は10月下旬頃まで続く。発生量は9月上中旬に最も多くなる。
- (2) 成虫は葉裏に数百個の卵を塊状に産みつける。卵塊は綿毛状のもので覆われ、卵粒は見えにくくなっている。ふ化した幼虫は若齢期(1~2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに、薬剤散布を行い、初期防除に努める。

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1. 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

2. ニカメイガ(ニカメイチュウ)

- (1) 4月第1半旬～7月第3半旬までのフェロモントラップ誘殺数では、京田辺市で平年比やや多く、亀岡市で平年比多く、京丹後市では平年並であった。
- (2) 年2世代発生し、第1世代幼虫の発蛾最盛期は6月上～中旬、第2世代幼虫は8月中旬である。被害の主体は第2世代幼虫であるため、多発時には防除する。
- (3) もちや茎の太い品種の作付け田では発生しやすくなる。
- (4) 野菜・チャ・イチジク等の栽培で稲わらを使用する地域では、発生しやすいので注意する。

3. イネアオムシ(フタオビコヤガ)

- (1) 山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

野菜

1. タバコガ類(オオタバコガ、タバコガ)

これらの害虫は発生が多くなると、大きな被害になるので注意する。特にナス、トマト等の果実に食入すると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、食入前の防除に留意する。

2. カメムシ類(トマト、ナス、トウガラシ、インゲン、エダマメ等)

周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

山城地域と丹波地域の一部で発生を認めているミナミアオカメムシは、京田辺市及び亀岡市の予察灯で平年比多い誘殺を認めている。本種は水稻の斑点米の原因になるとともに、果菜類も加害するので注意する。